

| | | | |
|---------|------------------------------------|--------|----|
| 氏名 | 蒔田 寛子 (学籍番号 09D011) | | |
| 学位の種類 | 博士 (看護学) | | |
| 学位記番号 | 第 7 号 | | |
| 学位授与年月日 | 2012 年 3 月 13 日 | | |
| 論文題目 | 保健医療福祉領域における高齢者の独居療養生活支援システムに関する研究 | | |
| 論文審査担当者 | 委員長 | 藤本 栄子 | 教授 |
| | 委員 | 木下 幸代 | 教授 |
| | 委員 | 濱松 加寸子 | 教授 |
| | 委員 | 渡邊 順子 | 教授 |
| | 委員 | 川村 佐和子 | 教授 |

論文要旨

I. 研究の背景

我が国では、高齢化率上昇および世帯構造の変化により、家族や社会の支援が得られない独居高齢者が増加すると予測されている。特に今後は、ADL が低下した状態で在宅生活を営む高齢者の増加が考えられる。40 年先には、ケアを受ける人とケアを担う人の比率が 1 : 1 となると推測されており、支援者をより有効に活用できるシステムの構築が求められている。

II. 研究目的

ADL 低下高齢者の独居療養生活を継続するための支援について、支援機能の視点から構造化し、機能充足型の支援システムを検討し、独居療養者の QOL 向上に寄与することを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

研究デザインとして質的記述的研究法を用いた。高齢の独居療養者の生活および、支援内容と方法を記述することにより、支援を含めた生活を理解すること、生活の理解に基づき機能充足型の支援システムの構造を導き出すことを目的としており、事象を記述することによりその事象を理解する質的記述的研究法が適切と考えた。

2. 研究対象者

研究対象者は、独居療養者とその支援者とする。療養生活には性差があると思われ、女性の単独世帯が多いという我が国の背景を考え、独居療養者を現在受診中で医療依存度が高く、訪問看護師が支援している女性高齢者とする。

3. データ収集および分析方法

- 1) 質問紙調査 ADL の評価を FIM により測定した。また支援の評価を SF-36v2 を使用し、独居療養者の QOL を測定することにより確認した。
- 2) 面接調査 研究対象者に対し、インタビューガイドを用いた半構成的面接を行った。
- 3) 倫理的配慮 研究対象者には、研究目的、研究方法、自由意志による参加であり、辞退により不利益はないこと等の倫理的配慮について紙面と口頭で説明し、同意書にて同意を確認した。研究に際しては、聖隷クリストファー大学の倫理委員会にて承認を得て(承認番号：10003)実施した。

4) 分析のプロセス 療養者と支援者の語りから独居療養生活継続のための要素と独居療養生活支援を機能として分析した。抽出された独居療養生活継続のための要素と、独居療養生活支援機能から、独居療養生活継続支援の構造を示すとともに、独居療養生活支援システムを検討した。

IV. 結果

1. 対象者の概要

研究対象独居療養者は 14 名であり、平均年齢は 79.8 ± 9.24 歳であった。研究対象支援者は、訪問看護師 15 名、ケアマネジャー 10 名 (訪問看護師兼務 2 名)、訪問介護職 9 名、非職業人 4 名、他 4 名の合計 41 名であった。

2. ADL 低下高齢者が独居療養生活を継続するための要素と支援機能の構造化

独居療養生活継続のための要素は分析により 17 のカテゴリーが、独居療養生活支援に関する機能は分析により 14 のカテゴリーが抽出された。17 の生活継続の要素と、14 の支援機能を統合し、独居療養生活の構造化を行った。独居療養生活継続のための 17 の要素は更に、生命の維持、生活の維持、生活のゆとりの 3 つの内容に整理できた。そして、これらは、セルフケアの内容と、潜在的なニーズへの援助を受けている内容があった。セルフケアの内容については、顕在的ニーズへの支援の依頼と、自らニーズを満たす行動であった。独居療養生活支援機能は、「理解」「援助」「援助の調整」という支援内容で分けられる 3 つの側面と、支援方法の 5 つの特徴の側面があった。独居療養者のニーズをふまえ、立場や職業的に特徴のある支援方法で支援していた。

V. 考察

症状変化の早期発見と対処等の潜在的ニーズを読み取り支援することが、療養生活継続にとって重要であると考えられた。少ない人数で必要な支援機能全てを担っていく場合、療養支援の専門職のみで担うという考え方ではなく、地域住民の支えあいを積極的に活用していくという考え方への転換が必要である。その際、独居療養者自身も必要な支援を依頼するという機能を果たすことが必要である。本研究結果を普遍化し、今後の独居療養生活支援システムを論じるには研究対象者の偏りと、療養生活支援システムに非専門職を求めることにさらなる検討が必要であり、これらに限界がある。そのため、独居療養生活支援システムを構築するまでには至らず、地域の力を積極的に活用できるような支援についての思考の転換およびそのひとつとしての機能充足型のシステムを提案するということにとどめた。

VI. 結論

ADL 低下高齢者の独居療養生活維持のための機能充足型支援システムは 2 つの側面により構造化することができた。独居療養生活支援システム構築にむけて、職業としてではなく支援している者の機能もあわせて、システムを構築する必要性の示唆を得、今後はこれらの支援者が提供している機能に対する支援を制度としてどのように扱っていくかが課題として残った。

論文審査の結果の要旨

本研究は、独居で療養生活を送っているADL低下高齢者（以下独居療養者とする）の在宅生活継続のための要素と支援を質的記述的研究法を用いて探求し、支援機能の視点から独居療養生活の構造化を図り、機能充足型の支援システムを明らかにしようとしたものである。

研究者が着目した独居療養者の在宅生活継続のための支援は、我が国における高齢化率の上昇および世帯構造の変化の一方で、療養支援の専門職者の総体的な不足といった社会状況を捉えたテーマとして研究の意義が十分に認められた。また、支援の総体を専門職だけでなく、非専門職の支援を含めて検討し、職業や立場に関係なく療養者に提供されている独居療養生活に必要な支援を明らかにしようとしている点に新奇性があると評価された。

研究対象者は独居療養者とその支援者であり、支援者の選定に際しては、一人の独居療養者を中心にかかわった中で同意が得られた者とした結果、偏りが生じており、支援システムの構築に不十分であるとの指摘があった。一方、専門職以外の支援者の支援を安定した支援とするためには、支援をいかに包括的に捉えた定義とするか、また社会制度のありかたに関する検討が必要となるなどの課題があり、それらの整備と方略が必要となる。そのため、これらを本研究結果から独居療養生活支援システムを構築することはできなかった。しかし、膨大なデータと緻密な分析から支援機能を抽出し、それをもとに地域の力を積極的に活用できるような支援についての思考の転換およびその一つとしての機能充足型のシステムを提案していることは、博士論文における、質的記述的分析に基づいた研究として価値のあるものとして評価された。

なお、分析の過程におけるカテゴリーの抽出については、抽象度が高すぎるために、研究対象者の支援機能が了解し難いとの指摘があり、今後、さらに精練させていくことが課題となろう。

ただし、先行研究や文献と関連させた分析結果の考察や、次の研究計画の課題設定も明確であり、本研究を糸口にテーマに沿った研究を発展させて行くことに十分な期待が持てる。

以上の結果から、審査委員会は、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。